

## 読書のすすめ

### 感じるこころを 育てよう

#### 松隈玲子

昨夜はじめて読んだ本を、夢中で覚えて今日話す、いわば、インスタントの食品でどうにか食卓をとりつくろったような日は、何ともわびしい思いと、子どもへのすまなきにかられます。

日々の保育の合間をぬって、子どもに与えることだけを目標に本を求

めるのでなく、直接そのまま、読みきかせ、語りきかせるものでなくとも、保育者が自ら感動し得る作品を求めて、ゆたかな感情を育てたいものです。

子どもと本との出会いが、文字のひろいよみの指導においてなされるのではなく、保育者が感動した物語を心の中で何度もあたためながら、慎重に時を選んでの読みきかせ、語りきかせでありたいものです。

保育者の子どもを思う心が、物語の作者の心情とつけあって、あたたかく、子どもの心をゆり動かし、作者と語り手（保育者）と聞き手（子ども）の三者関係がうまくむすばれる時、お話を楽しむ態度、本に親しむ習慣を育てていくように思います。

このような立場から、最近読んで、

あるいは、何度もくり返し読んで、是非おすすめしたいと思った本のいくつかを述べてみましょう。

「あおくんときいろいろちゃん」レオ

・レオーニ作 藤田圭雄訳（至光社）

作者のレオ・レオーニが、アトリエに遊びにきたお孫さんを遊ばせながらでき上がったといわれる、小さい子どものための暖かい思いの感じられるユニークな作品です。青と黄色のだんご型の色紙のちぎり紙が、主役のあおくんときいろいろちゃん。目も鼻も口も、ましてや、手足もないちぎり紙が、効果的に用いられた白の余白部分の中で、思う存分、語り、動き、泣く、個性的な役割を果たしています。

「あおくんが、きいろちゃんに会

えてうれしくてとうとうみどりになりました」

子どもたちはこの部分がすきで、何度もそこを開かせては「ホラネ」という顔をして、にっこりします。

「島ひきおに」 山下明生文 梶

山俊夫絵（偕成社）

海の中の島にたった一人で住んでいた鬼は、お友だちがほしくて、船や雲をみでは遊んでいけと叫びます。でも、誰も鬼に近よるものはありません。ある嵐の夜、その島にたどりついた漁師に「どうしたら友だちになれるか」とたずねます。生きた心地のしない漁師はできそうもない条件を考えて「島をひっぱってくればいい」と教えます。本気にした鬼はありたけの力を出して島をひっぱって漁師たちの村にやってきました。

でも、鬼をこわがった漁師たちは、はかりごとをめぐらして鬼を追い払ってしまいます。鬼は「こっちゃきて遊んでいけ」と叫びながら、遠い南の島には鬼と人間とが仲よく住んでいるといううわさを信じて、どこまでもどこまでも島をひっぱっていき、とうとう波の中に消えていくのです。この話が終わると、必ず何人かの子どもが、「鬼はいきているの？」「今でもまだ島をひっぱっているのよね」といいにきます。ほんとうに今でも海をみると……そんな思いのするお話です。

そのほか、「八郎」・「花さき山」なども、いろいろな思いを育ててくれる絵本です。いずれも斉藤隆介作、滝平二郎絵で、前者は福音館、後者は岩崎書店です。むくむくと大きくなって何かやりたいと願っていた八

郎が山を背負い、あれる海をしずめて、村を災害から救う自己犠牲。自分のことより人のことを思っただけで涙を流して辛抱すれば、花さき山に美しい花が咲くという花さき山。切り絵の特徴が充分にいかされて、文、絵ともにすばらしい作品です。ただ、この種の物語の読みかさは、感動をもって語るのとは大切ですが、それをどううけとめるかは子ども自身のものであり、感じ方の押しつけをしてはならないと思います。

「貝のうた」・「ちようの夢」 谷村まち子（ヨルダン社）

地球上のどこかでだれかがその隣人に小さな親切をする時、宇宙のどこかで星が生まれるという序章ではじまる「星のかんむり」と共に、なくなった娘さんに捧げる三部作であ

るといわれます。一人ぼっちのみにくい貝の娘が、からだの奥ふかくさった砂つぶをちち色の涙でつみ、美しい真珠を生み出す栄光の時を迎える話、一匹の小さなベニシジミが、美しいもののいのちが短いことを、さまざまな経験を通して教えられ、星の王女さまから永遠の国の話を聞いて安らかな気持ちになっていく、どちらも楽しく感動的な物語です。

直接の読みかせは幼児には無理な部分もありますが、大人の立場で読んでも心の洗われる思いのするお話です。絵話や影絵の教材に用いられ、幼児でも感動をもってうけとめることができるでしょう。

最後に「現場での問題をどうとらえたらよいか」「実践研究のヒントを」と相談にくる学生や、新しく現

場に出られた方に、紹介している本に、「保育の実践と理論」大場牧夫編著（ひかりのくに）があります。現場での経験をふまえての著者や、保育者としての先輩である方々の実践記録が共感をよぶことと、記録者、問題点の掘りおこし担当者、理論づけと三者による多方面からのとらえ方が具体的なアドバイスとなっていると考えられるからです。

また、子どものいのちを大切に思ひ、公害問題を自分のこととして考えるために「生と死の妙薬」——自然均衡の破壊者化学薬品——レーチエル・カーソン著・青樹 築一訳（新潮社）も、折をみて読んでおかれるとよい本であると思います。

（西南女学院短期大学）

## 幼児の教育第七十二巻第十号

十月号

定価二〇円

昭和四十八年九月二十五日印刷  
昭和四十八年十月 一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 発行者 津 守 真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一

印刷所 凸版印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所  
所 フレーベル館にお願いいたします